

農林害虫防除研究会 Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

News Letter No.18

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.18

2007年1月15日

研究会所在地：静岡県柑橘試験場病害虫研究室

〒424-0905 静岡県静岡市駒越西2-12-10

ホームページ： <http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>

巻頭言

研究会の今後に期待する

上遠野富士夫

(千葉県農業総合研究センター)

農林害虫防除研究会が設立して早11年目になる。多くの学会や研究会の会員数が年々減少する中、本会の会員数は、平成7年の設立当初は100人ほどであったものから毎年増加し続け、平成18年現在440人である。本会は、大学や公的試験研究機関の研究者だけでなく、農薬メーカーやJA全農などの民間企業や、行政、農業改良普及センター、病害虫防除所の方々、生産者など、農業の生産現場に直接携わる人も参集範囲に入れて、現場で問題になっている害虫やその防除法について、情報交換することを目的にしている。試験研究で開発された成果は、最終的には現場に普及することを目指しているが、その成果を速やかに普及するためには研究段階からの関係機関との密接な連携と情報交換が重要である。これまでの本会の研究発表の内容をみると、基礎研究から応用研究まで実に幅広い分野に及んでいる。また、大会時に開催されるシンポジウムでは、その年々で話題になっている新害虫や難防除害虫について取り上げられており、大会を盛り上げる大きな要素になっている。昨年開催された千葉大会では、最近関東にも急速に拡大したトマト黄化葉巻病の媒介昆虫であるタバココナジラミのバイオタイプQを中心テーマに掲げ、全国から300人も参加者があり、熱心な情報交換が繰り広げられた。

日本農業は、平成13年9月に千葉県で発覚したBSE問題に端を発し、平成14年8月には無登録農薬使用が発覚するなど、食の安全性を揺るがす事態が次々と引き起こされ、消費者からは安全性のみならず安心な農産物の提供を求める声が高くなっている。このため、農林水産省は生産者から消費者に軸足をシフトさせた施策へと方向転換することにし、平成15年3月には違反者への罰則規定も盛り込んだ新農薬取締法が施行になった。また、平成18年5月には、すべての作物で農薬残留基準値が設けられるというポジティブリスト制が施行され、農薬飛散防止対策も求められている。一方、大型船舶やジャンボ機などの輸送手段によるグローバル化が進み、大量の農産物が毎日輸入されている。それに付随して新たな害虫や難防除の病害虫も輸入農産物に紛れ込んで日本への侵入機会を伺っている。これに対して、植物検疫所では全職員上げて侵入阻止に鋭意努力しているが、このような厳密な体制であっても、日本に侵入する病害虫は後を絶た

ず、生産農家はそのたびに対策に苦慮している。このため、生産農家の研究機関に対する期待はますます大きくなっている。これらの問題を早急に解決していくためには、研究機関による技術開発はもちろんのこと、研究、普及、行政、生産現場が一体となって連携・協力していくことが重要である。

本会は研究、普及、行政、生産者など多方面にわたる多くの会員から構成されていることから、会員の発表を通じて現場で何が問題になっているかをいち早く知ることができるとともに、研究会を通じて実用的な技術開発が比較的効率よく進められるものと思われる。消費者は良質で安価、安全で安心な農産物を求めている。本会が生産者のみならず、消費者のためにも役立つ研究会として益々の発展していくことを期待したい。

ニュース

農林害虫防除研究会の名簿システムを作った時のこと

田中 寛

(大阪府立食とみどりの総合技術センター)

廣森さんとはじめて会ったのは11年前、1995年5月下旬の芝草学会春季大会の時である。まだ、大学院生であったが、学会の受付に詰め、いろいろな雑務を取り仕切っていた。「今からそれでは未が恐ろしいねえ(笑)」と彼に言った覚えがある。

私自身は1998年の茨城大会から農林害虫防除研究会に参加するようになったが、ここでも彼が事務・会計を切り盛りしていた。もちろん、彼が応動昆(日本応用動物昆虫学会)などでも盛んに発表しているのを知っている。私自身もワーカホリックの面があり、言えた義理でもないが、「おいおい、あんまり仕事をやりすぎると身体をこわすぞ」と彼に言った。

2000~2001年の2年間、ニュースレターの編集担当を仰せつかり、また、2001年に大阪大会を開催した。農林害虫防除研究会は中規模学会クラスの会員数があり、初回のニュースレター発送時にその手間に閉口したので、廣森さんと相談して、大会準備も兼ねてMs-Accessで名簿システムを作ることにした。

後任に引き継ぐことを(自分自身が後々に別件で使うことも)想定し、複雑な機能は一切使わないことにして、彼が管理していたMs-Excelの名簿を送信してもらい、Accessに変換し、会費納入、ニュースレター執筆、大会参加(講演・懇親会の有無等)等々の項目にチェックを入れることにより、各会員別に会費納入状況を記したニュースレター発送用宛名ラベルを印刷できるようにし、執筆勧誘の際の殺し文句(一度も投稿されていないので、ぜひ!)にも利用し、大会の名簿・名札等もそのまま使える形で印刷できるようにした。…複雑な機能を使わなかったのは正解である。今年も含めてその後何回もこのシステムを使っているが、そのたびに(単純明快簡便なものにもかかわらず、2年も経つと)使い方を思い出すのに時間がかかる。…使いたい方にはいつでも差し上げます。

なにせ二人ともMs-Accessを使うのははじめてである。しかも、バックアップを取る際に「同期=シンクロのクセ」があることを知らなかった。Access自身の「コピー」機能を使うと、コピーファイルがうまく作動してくれない。異なるフォルダの間で「移動+CTLキー(コピー)」をすればいいことがわかるまでにずいぶんと試行錯誤に時間を費やした。

ある晩のこと。11時頃に彼にメールとファイルを送った。ちょっと片付けものをして、帰ろうと思って最終のメールチェックをしたところ、返事が来ていた。《なるほど、そうすればいいのか。じゃあ、もうちょっとやってしまうか》と思って、1時間くらいかけて手直しして送ったら、またすぐに返事が来た。《おいおい・・・》と思いながら、もう一度手直しして送ったら、また来た。私が手直ししている間、彼はほかの仕事をやっているのだ。《しもたぁ！こいつは不眠動物か？エライヤツと付きおうてしもたぁ！》。「いつまでやるつもりや？これでおしまい！もう帰る！」というメッセージを付けてファイルを送った時には3時を過ぎていた。

今年3月の応動昆虫の大会で、廣森さんは世話人として、長らく途絶えていた昆虫病理小集会を持った。この小集会は好きで何度か参加し、発表したこともある。異変は感じなかった。6月の農林害虫防除研究会の大会でも（鈍感なのかもしれないが）異変は感じなかった。9月に突然の訃報が来た。今でも本当かなと思ってしまう。人の30年分の仕事を彼は10年そこそこでやってしまったのかもしれない。でも、そちらで再会した時、「寝かせてくれない」というのだけは勘弁してほしい。

コナガ及びアブラナ科野菜害虫の管理に関する 第5回国際ワークショップに参加して

宮田 正
(名古屋大学名誉教授)

標記国際ワークショップが中国・北京市内の北京友好ホテルを会場に、2006年10月24日～27日の会期で開催された。今回の開催は、台中（1985、1990年）、クアラルンプール（1996年）、メルボルン（2001年）に続いての開催で、114名の参加のもと43題の口頭発表と34題のポスター発表があった。ワークショップは過去のワークショップ同様1会場で開催され、（1）Biology, ecology and behavior of insect pests of crucifer, （2）Host plant resistance, habitat manipulation and Insect-plant interactions, （3）Insect-plant interactions in the crucifer crop systems and biological control, （4）Insecticides and insecticide resistance, Bt resistance and IPM の4つのセッションから構成された。1985年の第1回ワークショップと今回の講演内容を比較してみると、生態学分野は8%から22%（20%*）に、性フェロモン分野は8%から7%に、微生物防除分野は13%から7%（6%）に、生物防除分野は21%から16%（24%）に、化学防除分野は6%から11%（14%）に、殺虫剤抵抗性分野は23%から18%（16%）に、IPM分野は23%から11%（9%）に変化し、生態学分野の増加が突出していた。多くの発表のうち、筆者の記憶に残った発表のいくつかを以下に記す。前回のメルボルンでのワークショップで、コナガがエンドウに寄生することが報告され、参加者に大きな衝撃を与えたが、今回のワークショップでは生態学的及び遺伝学的な研究報告がなされた。コナガの殺虫剤抵抗性研究に加え、コナガの寄生天敵であるコナガサムライコマユバチの殺虫剤抵抗性に関する研究が報告された。殺虫剤抵抗性コナガの生態特性について、殺虫剤抵抗性系統では高温及び低温でよりコストが高いことが示された。また、今回のワークショップには朝鮮民主主義人民共和国から2名の参加があり、土着天敵とBt剤を利用した害虫管理についてオーストラリアの共同研究者が発表を行った。

全ての発表が終了した3日目の夕方、次回のワークショップ開催についての話し合いが持たれ、4年あるいは5年後に東南アジアでの開催を目指すことになった。ただ、今回のワークショップ

への参加者を見てみると、東南アジア諸国、開催国中国を除いた東アジア諸国からの参加者が極端に少なかったことである。日本からの参加者は筆者を含め4名であった。この原因についてはいろいろあると考えられるが、最大の原因は参加費が400米ドルとこの規模の国際会議としてはかなりの高額であること、途上国からの参加者への旅費援助がなかったことによるのではないかと考えられ、次回ワークショップ開催に当たっての留意点となった。

ワークショップは3日半の予定が3日間で終了し、最終日は北京市内の中国農業科学院野菜・花卉研究所への半日ツアーが急遽企画された。研究所は北京市内の中心部に位置するものの、花卉市場や中国の伝統的ビニールハウス群が敷地の一角に広がり、圧巻であった。見学の後、ワークショップ会場近くのレストランで昼食を取り、次回ワークショップでの再開を約束し、散会した。*：カッコ内の数値はポスター発表を含めたもの。

虫の絵のお皿

堤 隆文

(福岡県農業総合試験場)

私は趣味で古陶磁などをイジっている。と言っても、地方官吏の小遣い程度では買える物も自ずと限定されるので普段使う食器や酒器を中心に楽しんでいる。それでも、モノが良ければ多少のキズを繕った跡などは気にせず、むしろ、それを景色として愛でるくらいの余裕が必要である。骨董業界ではこのような人たちを、多少の哀れみを込めて「貧数寄(びんすき)」と呼んでいる。さて、貧数寄の私が好きな焼き物の中に「古染付(こそめつけ)」と呼ばれるグループがある。本来は17世紀前半(江戸初期)に日本から中国の景德鎮に注文して焼かせた、白磁に呉須(藍色の染料)で絵を描いた(これを中国では青花、日本では染め付け、欧米ではBlue and Whiteと呼ぶ)茶道具群のことだが、広義には明末~清初に中国の民窯で焼かれた染め付けの器を指す(明、清時代は官(宮廷)用の陶磁器を焼く官窯と民間用を焼く民窯を厳密に区別していた)。この古染付にはしばしば昆虫の絵が描かれている。それも結構リアルに。なかでも一番数が多いのはバツタ(トノサマバツタ?)で、「芙蓉手(ふようで)」と呼ばれる皿の見込み(中央部)に石の上にとまったバツタが書かれていることがある(鳥や宝物の場合も多いが)。いつか見たバツタは図鑑の挿絵のように正確に描かれ、ヒョットしたら属までくらい推定できたかもしれないほどであった。中国では古代からトビバツタによる災害がたびたび発生しているが、それでもバツタは吉祥アイテムなのであろう。芙蓉手の皿は日本でも生産され、江戸時代を通じて有田や王地で大量に焼かれている。しかし、日本の芙蓉手はコピーのためか、これがバツタ?という絵が多い。これがホントのバツタモノ・・・ナンチャッテ!。次いで多いのが蝶の絵である。もっとも、蝶の場合はバツタのように主役を張ることは少なく、花の脇役の場合が多い。しかし、例外的には写真のような皿もあ



る。この皿は、厳密に言えば古染付に続く「祥瑞手(しょんずいで)」に近いものであろうが、どちらにしても、清初ころの民窯のあまり上手ではない五寸皿である。まん中の蝶はタテ八であろうか、後翅の模様がヒョウモンチョウのように見える。周りを取り囲む虫は蜂であろう。数年前、マニアックな思いが生じて買ってはみたものの、周りの捻り模様と相まって結構怪しい雰囲気もするので、この皿に盛る料理のイメージは未だに湧いてこず、未使用のままである。蝶マニアのいかが？

オレゴン州立大学P.C.Jepson教授の来日について

根本 久

(埼玉県農林総合研究センター園芸研究所)

IPM及び生態毒性学の世界の権威として知られる米国オレゴン州立大学総合的植物保護センター所長ポール・C・ジェプソン教授が、8月6日に神戸で開催された国際純正応用化学連合(IUPAC)神戸大会参加のため来日された。私はこの国際会議の"IPM & Resistance Management"のオーガナイザーを仰せつかったものの、うまく講演者を集めることが出来なかった。私の他に、イギリスとアメリカの大学教授2人がオーガナイザーでいたが、そちらも同様な状態であった。講演者の候補になりそうな人の大部分は、農薬のリスクを減らそうとしている人で、IUPACに喜んできていただける状態ではなかった。国内の講演者と世界植物保護連盟からの推薦者は決まっていたものの、その他の海外の講演者については見込みがたなかった。その時に思いついたのジェプソン教授であった。

教授は、1995年にマレーシアの研修施設で開催された、FAOとIIBC合同による「生態毒性国際トレーニング」のスタッフの一人であり、当時イギリス・サザンプトン大学の教授で、私とはその時に合ったのが最初であった。10年前からアメリカ・オレゴン大学に移っていた教授に連絡を取り、IUPACに参加していただくようお願いしたところ、条件付きで了解を取り付けることが出来た。条件とは、日本の研究者と交流の機会を設けることであった。来日の際には、東京農大、中央農研、農環研、埼玉県の有機農法圃場を訪問し交流することが出来た。その中で、天敵の定着・増殖を促進する「昆虫増殖圃」の概念は日本では聞いたことがなく、新鮮であった。

ジェプソン教授の講演が決まってからは、イギリスRothamsted研究所・無脊椎動物生態学部長 I. Denholm博士やBoth大学のR. French-Constant教授といったResistance Managementのそうそうたるメンバーを加えることができた。今回の教授の来日の際には中央農研 宮井 俊一博士、農環研 平井一男博士並びに東京農大・生物的防除部会の榊井昭夫、平岡行夫の両氏を始め多くの方々が大変お世話になった。心から感謝申し上げます。

「虫に警戒されたか!？」

藤原 亮介(大阪府中部農と緑の総合事務所)

この業界に入って半年、突然降って沸いたように防虫ネットを利用したえんどうのナモグリバエ防除試験をすることになりました。様々な人の助けを借りながらどうにかこうにか試験をやり遂げ、勢いで今年の研究大会で発表までしてしまいました。これまで学会の個別報告の経験は

あったので、せいぜい50人ぐらいの前で話すかと思いきや、会場は300人以上。まさに今流行りの「予想外」でした。右も左もわからない私が突然参加したんですが、他県からナモグリバエの報告もあり、懇親会も含めて、普段聞けないような話も多く、非常によい経験になりました。

さて本題のナモグリバエですが、これまた昨冬は「予想外」の寒波で大阪でも何度となく積雪がありました。肝心の虫の発生も鈍く、最終的には防虫ネットを被覆していない対照区でも被害が少ないという、農家は喜び、普及員は頭を抱える結果となりました。しかしながら、市内の他の地区を回っていると、見事に被害が出ており、妙に心が騒いできました。虫に嫌われても農家に嫌われるなどどこかで聞きましたが、私も虫に嫌われたんでしょうか。おそらく、私ではなく、試験場のTさんのおかげだと思うんですが(笑)。

それともう一つ。28年間生きてきて「雨男」と言われたことはないんですが、どうも枚方市との相性が悪いのか、行くと2回に1回ぐらいは雨に降られます。農業関係のイベントへも参加していましたが、農政課の職員からはすっかり「雨男藤原」が定着してしまいました。ナモグリバエの調査でも3,4回は雨の中カッパを着てしてた記憶があります。冬の雨は体にしみ入りますから精神的に強くなった気がします。

ともあれ、今年は暖冬の予報。虫が大発生してもらっては困るんですが、去年と違う結果が出るのではと期待に胸をふくらませ、ネットを留める竹串を調達しに走りたいと思います。雨男の面目躍如もできればいいんですが……。

あなた好みの色に染めてみませんか!?

高岡誠一

(福井県農業試験場)

先日、試験圃場にネキリトンを撒きながら、『昔のネキリトンの粒って赤色だったよなあ~』と、ひとり言。またある日、ハスモンヨトウのフェロモントラップを設置していて、『日植防のファネルトラップは屋根が緑色でロートが黄色でバケツは白色なのに、なぜ、武田式ファネルトラップは屋根もロートも緑色なのだろう?』とつぶやく。そういえば、数年前の農林害虫防除研究会で、白、黄、緑?のストライプ入りのトラップは誘殺数が多いと発表されていたのを思い出す。真夜中に活動するのにどうやって色の違いを感じているのだろう?なんて、色への興味が強まる中、その日は突然に。昆虫飼育室で累代飼育昆虫の作業をしていた時、同じ部屋の片隅で、キクの耐虫性遺伝子を研究している女史が、試験に供試するオオタバコガの世話を。産卵場所用にと飼育ケースの中にクッキングペーパーを吊るし、成虫を放飼。それを見てビビッと。『なぜ、市販の白いクッキングペーパーをそのまま使っているの?』『オオタバコガって、自然界では葉や茎など緑色の部分に産卵する機会が多いんじゃないの!?』ということで、早速、クッキングペーパーを衣類用の染料で緑色に染め、オオタバコガの飼育ケースの中へ。数日後、女史が部屋に走り込んで来て、「高岡さん! 緑色のクッキングペーパーの方がすごく産卵数が多いですよ! 飼育ケースの内壁に産みつけられた卵もほとんどないですし!」。「それなら、次の世代で比較調査をしよう」ということで、目下、調査中ですが、全産卵数の70%以上は緑色の方に産み付けられています。「クッキングペーパーを緑色に染めたのは、大成功だね!」。すると笑いながら女史が「緑色に染めるのを発案した高岡さんは、ビール一杯で赤く染まりますけどね!」 う~ん、たしかに!

病虫害関係の研究者，技術者への期待が増している

松井正春
(三重県津市)

今年の春に農環研を定年退職してから，やや遠目に病虫害防除の問題を考えるようになった。最近の食品の安全・安心と環境保全のための施策展開には，目を見張るものがある。戦後の長い病虫害対策の歴史の中でも，このような急激な変容はなかったのではないか。これまでの生産第1の考え方から，消費者第1に切り替えられたためであろう。消費者の健康志向や好みに合わせた農産物の供給に如何に迅速に対応していくかが，経済がグローバル化した中で，輸入農産物に打ち勝っていくための重要な戦略となっている。農薬使用が厳格化し，残留が厳しくチェックされるようになって，外国産の農産物や養殖水産物の中から残留基準値を超えるものが多数検出され，それら産物の輸入量が減少している。私達の食べている外国産食品にそんなに農薬残留があったのかと改めて驚いてしまう。

振り返って，国内農業の病虫害防除において，農薬の使用基準（使用回数，使用時期など）内で病虫害をきちんと防除していくために，その技術的な裏づけや普及が今ほど大事になっている時はない。これからの病虫害防除の研究と普及に託された課題と期待はますます大きくなっている。また，最近では，地産地消ということで，農薬使用を減らし，農家の顔の見える農産物，そして，農村の環境保全に役立つ，あるいは環境負荷の少ない農業から生み出される農産物が求められており，ここでも病虫害防除や農業環境の研究者，技術者の役割が一層大きくなっていると思う。

私ごとだが，一線を退いて三重県津市に住み，紀伊半島の自然や文化を探索し楽しんでいる。これらも含めて，この9月にホームページを開設した（<http://www.zc.ztv.ne.jp/kiikankyo/index.html>）。害虫や農薬の問題，環境保全など農家の役に立ちそうな情報を掲載しようという当初の目的からやや逸れた記事もあるが，害虫防除以外の様々な情報も提供しながら，紀伊半島地域の人達等が，楽しみながら役立てられるものにできればと考えている。

ハッカハムシとヤサイゾウムシ，そして生物多様性研究

平井一男
(農業環境技術研究所)

最近，研究推進に関連して「研究成果の社会化」ということをよく耳にする。また消費者団体の皆様からは消費者が必要としていることをあらかじめ把握して研究目標を立てようのご意見やJA代表者からはIPMと言っているがなかなか浸透しないが何か工夫されたらどうかという提言がある（IPM論議は別の機会に）。さらに研究プロジェクト立案では政策ニーズのないものは，科研費に応募したらどうかと言われる。

農業環境技術研究所もそれに違わず，国/地方公共団体，市民/住民/生産者，研究機関，大学との連携が必要とし，特に生産現地に近い人々やNPO法人と意見交換を行う機会を設けている。過日全国の農業女性の集会「田舎のヒロイン」から約30名が出席され意見交換や研究説明を行った。畜産物廃棄，水質汚染の問題から，カドミ問題，GMO，病虫害などについて話し合った。

多くの時間を費やしたGMOについては、BSE問題が発生した時に牛が羊の肉骨粉を食べていることを初めて知った。GMOについても何か知らされていないことがあるのではないかと疑心が生じて信用できないと言う。研究者からは、生産者のなまの声を聞いて即答できないこともあるが、毎年の推進会議より多様な情報が入って役に立つとの声があった。頷ける意見である。

害虫関係ではリンゴ栽培者から最近初秋にリンゴやサクラに多発するケムシ（モンクロシャチホコ *Phalera flavescens*）の大発生の原因、また西日本でハーブを大規模栽培している専業農家からハッカハムシ *Chrysolina exanthematica* とヤサイゾウムシ *Listroderes obliquus* の防除法や土着天敵・微生物を増やすバイオコントロールについて聞かれた。見たこともなかったハッカハムシの対策については掘り取りや侵入防止しか思いつかないと申し訳を言って、後日成虫と幼虫の実物を送っていただき一時飼育した。バジルなどシソ科に被害が多いとのことである。ヤサイゾウムシについてはこの数年ハクサイや、チンゲンサイ、コマツナに多発し承知していたので、施設では侵入しないようにトレンチを設けると効果的との報告があるが、露地野菜では防除はなかなか難しいと話す。たとえば、9月中旬に播種したコマツナではほかの害虫防除用に播種時粒剤処理しても、成虫が歩いて侵入してくる10月以降には効かない。虫除けネットを張るのもベイするか大ごとである。発生数を調査すると雑木林に囲まれ湿地気味の畑に多く、日当たりが良く乾燥気味の広い畑では発生していなかったことから、日当たりが良く乾燥気味の広大な畑で、しかも越冬成虫が潜伏している雑木林の近くではない野菜畑では発生を回避できそうである。但しカブラハバチやヨトウムシの防除には対策が必要と補足した。

農林害虫関連情報として最近生物多様性の2010年目標について聞くことがある。つまり生物多様性条約第6回締約国会議(2002)で採択された2010年目標「生物多様性の損失速度を顕著に減少させること」について、第8回締約国会議(2006)では「締約国が国や地域レベルでの目標とそれに関連する指標を開発し生物多様性国家戦略などに組み入れることを促すこと」が決議されている。農林水産業においても生物多様性を持続的に利用していくために、農林水産業と生物多様性との関係を定量化する指標の研究・開発を進めること、具体的には多様性と生産性との共存方策の研究や、農耕地周辺に保護地域（範囲）を指定する研究などが必要になるのではと関係者と話している。

お知らせ

第16回 国際植物保護科学会議の案内

標記学会が以下の日程で開催されます。詳細は下記アドレスをご覧ください。

日時：2007年10月15～18日

開催場所：イギリス グラスゴー

関連WEB：<http://www.bcpc.org/IPPC2007>

第59回 作物保護国際シンポジウムの案内

標記学会が以下の日程で開催されます。詳細は下記アドレスをご覧ください。

日時：2007年5月22日

開催場所：ベルギーゲント大学

関連WEB：<http://www.iscp.ugent.be> E-mail:iscp@ugent.be

訃報

廣森 創氏を悼む

静岡大学農学部助教授 廣森 創 氏は平成18年9月17日肝臓がんのため、36歳の若さで逝去されました。氏は1969年京都府にお生まれになり、1995年岐阜大学大学院連合農学研究科博士課程修了後、同年静岡大学農学部助手に採用され、2006年同学部助教授に昇任されました。氏は何時もエネルギッシュに教育・研究に携わり、多くの学生から慕われておりました。研究では昆虫病原性糸状菌に興味を持たれ、コガネムシ類、ヨトウムシ類及びアブラムシ類に対する有効な糸状菌の探索やその作用機構を解明し、生物農薬としての利用に関する研究を精力的に行っておりました。更に、平成17年～19年農林水産省研究高度化事業「昆虫病原菌を基幹としたアブラナ科野菜害虫の防除体系の確立」の研究チームリーダーとして活躍されておりました。この研究半ばにしてこのような病に侵され、さぞかしご本人にとっては残念至極であったこととお察しいたします。また、氏は応用動物昆虫学会の若手評議員としてご活躍されておりました。さらに、農林害虫防除研究会の会計幹事ならびに事務長としても長年活動されておりました。改めて、ご本人のご冥福と残されたご家族のご多幸をお祈りいたします。

平成18年12月 静岡大学名誉教授 廿日出正美

故 廣森 創氏遺児育英資金募金のお願い

廿日出正美前会長の追悼文にもあるとおり、本会事務長の廣森 創氏が36歳の若さで急逝されました。

ご遺族には麻由夫人と長男健斗君（2歳）がおられます。本研究会、静岡大学、同大学同窓会関係者が発起人となり、同氏の遺児育英資金を募っております。会員の皆様におかれましても、主旨にご賛同をいただき、ご支援をお願いいたします。

なお、募金方法は下記の通りです。

記

1. 募金 1口 1,000円
2. 払込期限 平成19年2月13日（火）
3. 送金方法
郵便振替 口座番号：00880-4-60325 口座名称：廣森 創氏遺児育英資金募金会
現金書留 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学農学部
廣森 創氏遺児育英資金募金会
4. 問合せ先（事務担当）
〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学農学部 西東 力 電話：054-238-4790
5. 発起人（本会関係者、敬称略）
平井一男、上遠野富士夫、丸山宗之、廿日出正美、西東 力

第12回農林害虫防除研究大会（福島大会）のご案内

第12回農林害虫防除研究大会を、平成19年6月28日(木)～29日(金)に福島市飯坂温泉で開催します。今回は、「IPM実践現場から」をシンポジウムのテーマとし、IPMの普及に当たってこられた現場の方々から提言をいただきます。皆様の参加をお待ちしております。

大会の案内は、本誌上に概要を掲載し、別途案内文書を送付していました。本大会では、事務の効率化、経費節減のため、本誌に案内文書を同封しております。別途、会員宛案内文書は発送しませんのでご注意ください。

なお、ホームページ (<http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>) への掲示、関係機関への文書発送による大会案内は従来どおり行います。また、新たにメールアドレス登録会員についてはE-mailでもご案内します。

大会事務局 〒963-0531 福島県郡山市日和田町高倉字下中道116
福島県農業総合センター 生産環境部 荒川昭弘, 中村 淳
Tel : 024-958-1716 Fax : 024-958-1727
E-mail : nougyou.kankyuu@pref.fukushima.jp

第11回農林害虫防除研究会千葉大会報告

第11回農林害虫防除研究会 - 千葉大会は2006年6月22日(木)～23日(金)の2日間、千葉市の千葉大学西千葉キャンパスけやき会館において、286名が参加して開催されました。プログラムは以下のとおりです。

「1日目」開会(13:00)

シンポジウム(13:15～16:40):「コナジラミ類による被害の拡大と防除対策」[座長:林英明(広島県立農業技術センター)] 1.タバココナジラミの発生状況と今後の課題 - (本多健一郎:(独)野菜茶業研究所), 2.コナジラミ類が媒介するウイルス病の種類と特徴及びタバココナジラミバイオタイプQの簡易同定法 - (上田重文:(独)九州沖縄農業研究センター), 3.コナジラミ類の薬剤感受性について - (小林政信:全農営農・技術センター), 4.熊本県におけるトマト黄化葉巻病及びコナジラミ類の発生と防除対策 - (行徳 裕:熊本県農業研究センター生産環境研究所), 5.高知県におけるトマト黄化葉巻病及びコナジラミ類の発生と防除対策 - (広瀬拓也:高知県農業技術センター), 6.静岡県におけるトマト黄化葉巻病及びコナジラミ類の発生と防除対策 - (杉山恵太郎:静岡県農業試験場), 7.千葉県におけるトマト黄化葉巻病及びコナジラミ類の発生と防除対策 - (大井田寛:千葉県農業総合研究センター)

一般講演(16:40～17:25) 1.天敵カルテ7年目の総括と今後(田中 寛:大阪食みセ), 2.土着天敵を温存した有機JAS規格に合うナス害虫防除体系の確立 = JAS防除体系と慣行減農薬防除園との比較(根本 久:埼玉農総研・園), 3.昆虫病原糸状菌を利用したマツノマダラカミキリ成虫駆除法の確立(樋口俊男:日東電工株)

研究会総会(17:25～18:00)

「2日目」

一般講演(9:00～14:45) 4.鳥取県のネギにおけるネギアザミウマに対する薬剤感受性と防除効

果(佐古 勇:鳥取西部総合事務所農林局), 5.ジノテフラン顆粒水溶剤の灌注処理によるネギハモグリバエ防除について(内藤 遵:アグロカネショウ(株)) 6.育苗施設における黄色粘着テープを用いたナモグリバエの防除(栗原 潤:長野県野菜花き試験場佐久支場), 7.春採り実エンドウにおけるナモグリバエの発生状況と薬剤の効果(藤原亮介:大阪府中部農と緑の総合事務所), 8.アルファルファタコゾウムシ導入寄生蜂の植物選好性:カラスノエンドウ花外蜜腺の重要性について(上野高敏:九大生防研), 9.アズキにおけるノメイガ類の発消長と数種殺虫剤の防除効果(徳丸 晋:京都府農業総合研究所), 10.チャノココクモンハマキの脱皮ホルモン系 IGR 剤(脱皮促進剤)に対する薬剤抵抗性(小澤朗人:静岡県茶業試験場) 11.神奈川県内におけるタバココナジラミの発生状況(大矢武志:神奈川農技セ), 12.新規化合物スピロメシフェンのコナジラミ防除への展開(中倉紀彦:バイエルクロップサイエンス(株)), 13.新規コナジラミ類忌避剤 IKR-001 の開発について(秋吉信行:石原産業), 14.トマト黄化葉巻病の総合防除(高橋尚之:高知農技セ), 15.小ギク露地圃場での簡易ネット被覆によるオオタバコガの防除と経営評価(国本佳範:奈良県農業総合センター), 16.キクの害虫に対する生育期株元処理剤の効果~普及にむけて~(大場圭介:宮城県石巻農業改良普及センター), 17.ハイマダラノメイガの発生予察における合成性誘引剤の利用(八瀬順也:兵庫農技総セ), 18.クモヘリカメムシ雌成虫の産卵休止と開始に及ぼす温度, 日長および餌の影響(三浦一芸:近中四農研センター), 19.アカスジカスミカメの休眠覚醒に関する研究(重久眞至:滋賀県農業技術振興センター), 20.アカヒゲホソドリカスミカメの発育と産卵に及ぼす餌および温度の影響(木村勇司:青森県農林総合研究センター), 21.モクセイマルハダニのナシ園への侵入の可能性とミカンハダニとの交尾干渉(北嶋康樹:茨城大学農学部), 22.アジュバントの加用がハダニ類の防除効果におよぼす影響(井村岳男:奈良県農業総合センター)

閉会(14:45)

1日目の研究会総会終了後千葉大学生協食堂において, 186名が参加して情報交換会が開催され, 活発な情報交換が行われました。多数の皆様のご参加とご協力により, つつがなく終了することができましたことに感謝いたします。

(第11回千葉大会事務局 千葉県農業総合研究センター 吉井幸子)

第11回 農林害虫防除研究会 通常総会議事録

日時:平成18年6月22日17:25~18:00

場所:千葉市 千葉大学 西千葉キャンパスけやき会館

- 1.開会
- 2.会長挨拶:平井会長より総会への出席と運営に対する感謝を述べた。
- 3.議長選出:平井会長を議長として選出した。
- 4.議事

(1)平成17年度事業報告

庶務報告:事務長より現会員数, 17年度事業報告があった。

1.庶務報告

会員動勢(2006年3月現在)

現会員数	397名
内従来会員(2005年までに入会)	400名

2005年度新規入会 16名

2005年度退会 19名

2. 事業報告 (平成17年1月1日～平成17年12月31日)

1) 平成17年6月: 第25回常任幹事会 (金沢都ホテル, 金沢)

2) 平成17年6月: 第10回研究大会および総会 (金沢都ホテル, 金沢)

3) 平成17年7月: ニュースレターNo.15 発行

4) 平成17年11月: 役員会 (静岡大学, 静岡)

5) 平成17年12月: 第26回常任幹事会 (ホテルラングウッド, 日暮里)

6) 平成18年1月: ニュースレターNo.16 発行

会計決算・監査報告: 事務長より会計決算報告があり, 会計監査役員の片山氏より監査報告があった。会計決算について会員より承認された。

ニュースレター編集報告: 横須賀編集委員よりNews letter No15,16の編集に関する報告と, 編集作業に関するお礼があった。

(2) 平成18年度事業計画および予算

平成18年度事業計画: 事務長より平成18年度の事業計画について説明があった。

1. 平成18年度事業計画 (平成18年1月1日～平成18年12月31日)

1) 平成18年6月: 第27回常任幹事会 (千葉大学, 千葉)

2) 平成18年6月: 第11回研究大会および総会 (千葉大学, 千葉)

3) 平成18年6月: ニュースレターNo.17発行

4) 平成18年12月: ニュースレターNo.18発行

5) 平成18年12月: 第28回常任幹事会 (日本植物防疫協会, 駒込)

平成18年度予算案: 事務長より平成18年度の予算案について説明があった。

(3) 平成18,19年度 役員・幹事について: 平成18,19年度の役員・幹事について説明があり, 県幹事については適宜変更を行うことが申し合わされた。

(4) 平成19年度 (2007年) の大会開催地について: 平井会長より次年度の大会について福島県で開催したいとの提案があり, その経緯について説明があった。その後, 福島県の荒川昭弘氏より開催地応諾と協力要請があった。

以上事業計画, 予算案, 役員, 次期開催地などが一括承認された。

5. その他: 特になし

6. 閉会

農林害虫防除研究会会則

(名称)

第1条 本会は, 農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳をAgricultural Insect Pest Management Society of Japan (略称 AIPM Society of Japan) とする。

(目的及び事業)

第2条 本会は, 農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い, 会員相互の知識の高揚と親睦を通じて, 農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は, 目的達成のため次の事業を行う。

(ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換

(オ) その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

(会員)

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

(役員等)

第8条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 常任幹事 25名前後
4. 事務長 1名
5. 都道府県幹事 47名
6. 会計監査 2名
7. ニュースレター編集担当 1名
8. 情報担当 1名

第9条 役員任期は2年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員の出選方法は以下の通りとする。

(ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考し、総会で承認を得る。

(イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第12条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年1回、通常、大会期間中に開催する。大会は毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費、寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 1. この会則は平成8年6月22日から施行し、一部改正を平成13年6月28日に行った。

2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い、会計年度を以下の通りとする。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日、平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。

農林害虫防除研究会役員名簿 (2006～2007年)

会 長：平井一男

副 会 長：上遠野富士夫，丸山宗之

常任幹事：阿久津四良，井村岳男，江村 薫，笠松紀美，行徳 裕，河野義明，後藤哲雄，小林政信，西東 力，田中 寛，豊嶋悟郎，西松哲義，根本 久，春山裕史，林 直人，二口欣也，古橋嘉一，本多健一郎，増田俊雄，松淵定之，宮井俊一，宮田 正，村井保，本山直樹，山本敦司，横須賀知之，和田哲夫

事 務 長：増井伸一

会計監査：久保田 栄，片山晴喜

ニュースレター編集担当：行徳 裕，山本敦司

情報担当：本多健一郎

農林害虫防除研究都道府県幹事名簿

都道府県名	氏 名	都道府県名	氏名	都道府県名	氏名
北海道	中尾弘志	青森	川嶋浩三	岩手	藤沢 巧
宮城	増田俊雄	秋田	新山徳光	山形	上野 清
福島	荒川昭弘	茨城	上田康郎	栃木	小山田浩一
群馬	千本木市夫	埼玉	根本 久	千葉	上遠野富士夫
東京	小谷野伸二	神奈川	阿久津四良	山梨	村上芳照
長野	豊嶋悟郎	新潟	中野 潔	富山	村岡裕一
石川	笠島 哲	福井	高岡誠一	岐阜	平 正博
静岡	久保田栄	愛知	滝本雅章	三重	大谷一哉
滋賀	小嶋俊彦	京都	徳丸 晋	大阪	柴尾 学
兵庫	足立年一	奈良	井村岳男	和歌山	森下正彦
鳥取	伊澤宏毅	島根	奈良井祐隆	岡山	近藤 章
広島	林 英明	山口	和泉勝則	徳島	中野昭雄
香川	松本英治	愛媛	荻原洋晶	高知	広瀬拓也
福岡	堤 隆文	佐賀	衛藤友紀	長崎	大久保宣雄
熊本	行徳 裕	大分	小野元治	宮崎	黒木修一
鹿児島	井上栄明	沖縄	谷口昌弘		

研究会への入会方法

事務局（増井伸一，静岡県柑橘試験場病虫害研究室，〒424-0905静岡県清水区駒越西2丁目12-10，Tel：0543-34-4854，E-mail：shinichi1_masui@pref.shizuoka.lg.jp）までお知らせください。News Letterと振替用紙（郵便振替：農林害虫防除研究会00810-0-82999）をお送りします。年会費は1,000円です。

会費納入のお願い

2007年度会費の納入をお願いします。振り込み用紙を同封しておりますのでご活用下さい。

2006年度までの会費納入状況については、西暦の下2桁と納入の有無を()内に示してあります。()内の は納入済年度を、×は未納年度を、-は未加入年度です。年会費は1,000円です。あらかじめ複数年分を同時に納入することも可能です。会費納入について不明な点があれば、上記事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

ニュースレター 20記念誌の企画募集

1998年5月25日に 1が発行された機関誌ニュースレターも今年で10年目を迎え、12月には 20の節目を迎えます。編集では、20を記念誌として発行することを予定しています。福島大会と19で案内できるよう幹事会でも企画を検討中です。また、全ての会員が参加できる内容にしたいと考えております。

会員皆様からの企画もあわせて募集します。意見、要望、企画がありましたら、編集幹事 行徳までご連絡下さい。なお、連絡先は編集後記の住所と同じです。

編集後記

他の分野の研究者からしばしば「病虫害はいいよネ。次から次に問題が起こって。」といわれます。確かに、カメムシ類やウンカ類の多発生、バイオタイプQの新発生、ポジティブリスト・・・と入れ替わり立ち替わり、害虫の問題が持ち上がってきました。問題の発生で注目され、予算も(雀の涙程度は)増えますが、それ以上に仕事量が増えます。

ちなみに、虫の写真を撮るのが私の数少ない趣味の一つですが、近頃は山に出かけて写真を撮る機会がめっきりと減りました。逆に、ハウスや田んぼでの写真は増える一方で、良いのか悪いのか・・・。

「今年こそは山で思う存分写真を撮りまくるぞ!」と毎年決心するのですが、今年はどうな年になるのでしょうか?そろそろ害虫関係者にとって平穏で、骨休めができる年があってもいい頃だと思えます。そうすれば、原稿の投稿がもう少し増えて編集幹事も助かるのですが。

ニュースレターでは365日、原稿を受け付けています。奮ってご投稿下さい。投稿方法は、(1)電子メール、(2)フロッピーディスク郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。文字数は400~1200字程度で写真の掲載も可です。使用するワープロソフトは、Windows版の一太郎、Word、Ms-Dosテキストを歓迎します。書式(スタイル)の規定は特に設けません。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：行徳 裕

〒861-1113 熊本県合志市大字栄3801熊本県農業研究センター生産環境研究所病虫害研究室
Tel: 096-248-6490, Fax: 096-248-6493, E-mail: gyoutoku-y@pref.kumamoto.lg.jp.

***** ニュースレターNo.18 (2007年1月発行) 目次 *****

< 巻頭言 >

研究の今後に期待する	上遠野富士夫	1
------------	--------	-------	---

< ニュース >

農林害虫防除研究会の名簿システムを作ったときのこと	田中 寛	2
---------------------------	------	-------	---

コナガ及びアブラナ科野菜害虫の管理に関する 第5回ワークショップに参加して	宮田 正	3
--	------	-------	---

虫の絵のお皿	堤 隆文	4
--------	------	-------	---

オレゴン州立大学P.C.Jepson教授の来日について	根本 久	5
-----------------------------	------	-------	---

虫に警戒されたか!?	藤原亮介	5
------------	------	-------	---

あなたの好みの色に染めてみませんか!?	高岡誠一	6
---------------------	------	-------	---

病害虫関係の研究者, 技術者への期待が増している	松井正春	7
--------------------------	------	-------	---

ハッカハムシとヤサイゾウムシ, そして生物多様性研究	平井一男	7
----------------------------	------	-------	---

お知らせ		8
------	--	-------	---

訃報 廣森 創氏を悼む		9
-------------	--	-------	---

故 廣森 創氏遺児育英資金募金のお願い		9
---------------------	--	-------	---

第12回農林害虫防除研究大会(福島大会)のご案内		10
--------------------------	--	-------	----

第11回農林害虫防除研究大会(千葉大会)報告		10
------------------------	--	-------	----

第11回農林害虫防除研究会通常総会議事録		11
----------------------	--	-------	----

農林害虫防除研究会会則		13
-------------	--	-------	----

農林害虫防除研究会役員名簿		14
---------------	--	-------	----

農林害虫防除研究都道府県幹事名簿		14
------------------	--	-------	----

研究会への入会方法		15
-----------	--	-------	----

会費納入のお願い		15
----------	--	-------	----

ニュースレター 20記念誌の企画募集		15
--------------------	--	-------	----

編集後記		15
------	--	-------	----

目次		16
----	--	-------	----